

## 第1回食品産業戦略会議 議事概要

○日 時 平成30年11月2日（金）8：00～9：30

○場 所 食料産業局第1会議室

○出席者 大塚委員、加藤委員、栗田委員、篠崎委員、中嶋委員、宮川委員、山口委員、  
香田委員代理  
新井食料産業局長、倉重大臣官房審議官、東野食品製造課長、山平農林水産  
技術会議事務局研究推進課課長補佐、石川農業・食品産業技術総合研究機構  
企画調整部研究管理役

### 概 要

（開会の挨拶）

○ 新井食料産業局長より挨拶

- ・ 今年の4月に「食品産業戦略」をとりまとめ、生産性向上、海外展開などを含め2020年代の我が国の食品産業のあり方を指針として公表。
- ・ 今年度は、この戦略を踏まえた上で、これを深掘りし、機械化等のハード面及びそれを支える製造工程の最適化、職員のモチベーションを高める取組等ソフト面の両面で検討していただく。
- ・ 本会議は、新たな委員及び各企業の有識者に参加いただいております、活発な議論をお願いしたい。

（議事）

(1) 食品産業戦略会議について

○ 食料産業局より、食品産業戦略会議の趣旨等について説明。

(2) 食品製造業における労働力不足克服のためのビジョン検討について

○ 食料産業局より、食品製造業の付加価値額、欠員率、労働災害の発生状況、食品機械の販売動向、生産工程別の人員分布及び機械導入率、食品機械メーカーへの期待が大きい工程、「食品産業生産性向上フォーラム」参加者の主な関心事項、職員のモチベーションを高めるための取組、今年度のテーマ等について説明。

(3) 委員自己紹介

○ 各委員より、自身のバックグラウンドや経験、自社での取組等について発言。

(4) 有識者の取組紹介

○ 味の素(株)香田委員代理から、グループ企業の食品製造の概要、これまでの機械化・自動化(※)の状況及び生産方式ごとの機械化・自動化の方向性、サプライチェーン全体での食品産業における課題等について紹介。

- ・ 食品製造のプロセスとAIなどICTの双方に精通した人材がいなくても自動化が思う様に進まないひとつの要因。
- ・ 機械化・自動化には、頭で考えるより広いスペースが必要であり、プロセス全体を対象に機械化・自動化を実施するならば、工場の建て替えなどのタイミングなどでなければ難しい。

※ 機械化) 機械を用いて加工を行うようにする混合機、乾燥機などを指す  
自動化) 機械を動かすために必要な付帯作業を人手に頼らないようにするこ

とを指す、装置の洗浄、設定の変更、物の運搬、原料選別などが対象例

(5) 意見交換

○ 有識者の取組紹介を踏まえた委員からの主なコメントは以下のとおり。

(先端技術の活用について)

- ・ AI を活用し、将来的に機械化・自動化に全て対応した生産が成立することを頭では想像し得るが、アラームが鳴った際に AI が食品製造過程で何が起こったか全て判断し、正しい対応ができるか疑問は残る。人の監視が必要な部分もある。
- ・ 熟練工の作業を機械化・自動化することのメリットは大きいですが、一方で人に教えるチャンスが減り、自動化された工場ですべて初めて働き始める人が、異常を知らせるアラームが鳴ったときにその意味を理解できるようになるか否か心配は残る。発生するあらゆる異常を機械自身が自動で解消してくれる様になるかわからない。
- ・ 大企業は、工場の更新時が機械化・自動化のタイミングかもしれないが、中小企業はライン全体を変更することは困難で、消費者からクレームが来たときに後付けで機械を設置することになるので、5年、10年経過した機械にも対応できるものであるとありがたい。

(設備投資の判断について)

- ・ 商品に問題が起こった際は、検品が強化されコストがかかる。AI は日進月歩しているので、検品の自動化への期待は大きい。
- ・ 設備投資する際には、社内の生産部門がマーケティング・販売部門に、採算性の説明が必須で一気に機械化・自動化の方向へドライブできるわけではない。
- ・ 包装工程での重量のブレ幅が縮小することにより利益が生まれることが見込まれれば設備導入のインセンティブになる、また、経営層は安全・安心はブランド価値を傷つけないための将来のリスクへの投資と考えている。
- ・ 20年前は中高生や 0L を対象にしていたため新商品のサイクルが早かったため、生産ラインに投資する機会が限られていた。今は高齢層を対象に機能性を謳った商品でロングサイクルを目指しているため、投資できる環境にはなっている。

(従業員の意識について)

- ・ 生産ラインが頻繁に止まると不良品率が高くなるため、工程管理していく中で安全・安心の意識を従業員に植え付けていくことも重要。

(その他)

- ・ 機械メーカーは、メンテナンスを通じて生産性向上に向けたサービスを提供できるようにしたいが、それには機械信号のアウトプットやデータ規格が一元化されることが必要。
- ・ 機械化・自動化とともに、商品サイクル、賞味期限の見直し、取引ルールなどを含めたサプライチェーンを改善していく必要。また、SKU (Stock keeping Unit, 在庫管理の単位) を考えると包装形態を少なくしていくことも必要。

(6) 今後の進め方等について

○ 食料産業局より、今後の進め方等について説明。

以上